

第七話 全てを託するという心境で祈る

なぜ、「要求の祈り」は天に届かないのか

では、第七の技法は、何か。

第七の身体的技法 全てを託するという心境で祈る

それが第七の技法であるが、改めて言うまでもなく、昔から、神や仏、天といった「大いなる何か」と繋がるための技法として、神社仏閣などで「祈る」ことや「拝む」ことは、無数の人々によって行われてきた。

また、宗教、宗派を問わず、厳しい修行を重ねる宗教者は、この「祈る」ことや「拝む」ことによって、「大いなる何か」と深く結びつくことを目指してきた。

従って、もし我々が、「大いなる何か」の存在を信じ、その存在と結びつき、そのことによって必要な叡智が与えられることを願うならば、この「祈る」ことや「拝む」ことは、最も基本の技法であり、究極の技法でもある。そして、これを本書の言葉で述べるならば、「祈る」ことや「拝む」ことによって、我々の中から「大いなる何か」＝「フィールド」と繋がる「賢明なもう一人の自分」が現れ、必要なとき、必要な叡智を教えてくれるのである。

ここまで述べてきたように、筆者は、この「大いなる何か」＝「フィールド」の存在を信じていることから、深い思考や思索が求められるとき、明晰な直観や洞察が求められるとき、心を整えて「祈る」ことを習慣としている。そして、この「祈り」を通じて、新たな発想やアイデアが与えられることは、極めてしばしば体験している。

しかし、もし我々が、「祈る」ことによって、新たな発想やアイデアを得たいと思うならば、やはり、一つ、理解しておくべきことがある。

それは、「要求の祈り」をしないということである。

例えば、明日の重要な企画会議を前に、「明日の企画会議で高く評価される企画の斬新な発想を教えたまえ」と祈ることや、商品開発の担当者として、「大ヒットとなる商品企画のアイデアを教えたまえ」といった祈りはしないということである。

こうした祈りは、神仏や天といった「大いなる何か」に、自分の願望通りのものが与えられることを求める祈りであり、「要求の祈り」と呼ぶべきものであるが、実は、こうした「要求の祈り」によって「賢明なもう一人の自分」が動き出すことは、あまり無い。従って、目の前の問題を解決するための叡智を教えてくれることも無い。

もとより、こうした状況で、そうした祈りをしたくなることは、人情として理解できるが、実は、こうした祈りは、あまり効果が無い。

それは、なぜか。

なぜなら、我々の心の中で、「否定的な感情」が渦巻いているときや、「エゴ」が強く動いているときは、「賢明なもう一人の自分」は現れてこないからである。そして、動き出さないからである。

しかし、我々が「要求の祈り」をするときとは、多くの場合、「良い発想を出さなければ」や「良いアイデアを出さなければ」という否定的な強迫観念を抱いていた、「明日の会議で評価を上げたい」「ヒット商品を出して注目されたい」といったエゴが強く動いているからである。

すでに、第二部の第三話において述べたように、「賢明なもう一人の自分」は、我々が、目の前の問題に対して、強く「答え」を求めているときには、あまり、その「答え」を教えてくれないが、逆に、我々が、その「問い」を忘れているときに動き出し、「答え」を教えてくれるという性質を持っている。その一つの理由は、「賢明なもう一人の自分」は、我々の感情やエゴ、願望や要求には耳を貸さないという性質を持っているからである。

では、どうすれば良いのか。

もし、「要求の祈り」によっては「賢明なもう一人の自分」が動き出さないとすれば、我々は、どのような「祈り」をすればよいのか。

誤解を恐れずに言おう。

「全託の祈り」である。

それは、文字通り「全てを託する祈り」、「大いなる何か」に目の前の問題の今後の展開も、解決への道も、すべてを託する祈りである。

すなわち、「要求の祈り」が「何々の問題を、こうして解決したまえ」と希望する結果を明示して祈るものであるのに対して、「全託の祈り」は、希望する結果を明示せず、ただ「何々の問題を、導きたまえ」と祈るものである。

言葉を換えれば、「全託の祈り」とは、その問題の結果がどうなるかについては、すべて「大いなる何か」に託するという、覚悟を定めた祈りである。

3

先ほども述べたように、切実な問題を前に、誰であっても「要求の祈り」をしたくなる心境は、人情としても理解できる。そして、ここで述べるような「全託の祈り」の覚悟を定めることは、決して楽なことではない。

しかし、もし我々が、ひとたび、この覚悟を定めることができるならば、不思議なほど、心の中の感情やエゴは鎮まっていく。

そして、その感情やエゴが鎮まったとき、我々の中の「賢明なもう一人の自分」が、動き出すのである。そして、我々に、その問題にどう処すべきか、賢明な叡智を囁いてくれるのである。

こう述べてくると、あなたは、何か極めて宗教的な話を聞かされているように感じるかもしれない。しかし、本書では、あくまでも、自分の中から創造的な発想やアイデアが生まれるための技法について述べているのである。そして、深い思考や思索が生まれるための技法について語っているのである。

もとより、すでに第一部第八話で述べたように、「大いなる何か」というものが存在するの否か、その正体が「ゼロ・ポイント・フィールド」であるの否か、自分

の中の「賢明なもう一人の自分」が存在するのか否か、その「もう一人の自分」がフィールドに繋がるのか否かについて、現在の科学は、否定も肯定もしていない。

しかし、その議論の如何にかかわらず、昔から「無心のとき、直観が閃く」という言葉が語られるように、もし我々が、目の前の問題に対して、創造的な発想やアイデアを求めているのであれば、また、鋭い直観や洞察を求めているのであれば、さらには、深い思考や思索を求めているのであれば、まず何よりも大切なことは、「心を整える」ことである。

すぐに「無心」の状態になれないとしても、心の中の感情の起伏を静め、エゴの動きを鎮めることによって、「心を整える」ことである。

この第七の技法で述べている「全てを託するという心境で祈る」ということは、究極、そうした「心を整える」ための技法に他ならない。

しかし、もし我々が、「心を整える」ことができるなら、不思議なほど、心の奥深くから「賢明なもう一人の自分」が現れてくる。そして、目の前の問題に処するため、深い叡智を囁いてくれるのである。

筆者は、永年の「思考のプロフェッショナル」としての歩みの中で、その不思議を何度も体験してきた。

たしかに、筆者は、永年、科学者としての教育を受けてきた人間であり、唯物論的な世界観を学んできた人間である。しかし、それでも否定できないほど、その不思議を、何度も体験してきた。

それが、本書において、誤解を恐れず、あなたに、この技法を伝える理由である。

あなたの中にも、必ず、その不思議な力が宿っていることを伝えたい。

この一度かぎりの人生において、その力を十全に開花させて頂きたい。

それが、自らの中のためらいを超え、本書の筆を執った理由である。